

山口市荻峠遺跡出土土器について

田畑 直彦

1 はじめに

荻峠遺跡は山口市下宇野令荻峠に位置する弥生～古墳時代の遺跡である。小野忠熙氏による『山口県の考古学』では、「花崗岩丘の頂からその南東の丘麓にかけて立地する弥生中期（Ⅱ期からⅢ期）の集落遺跡である」とされ、調査履歴についても簡潔にまとめられている。また、山頂付近は弥生時代の高地性集落であり、『高地性集落跡の研究 資料篇』にも記載されている²⁾。しかし、これまで出土遺物については未公表であった。当館は小野忠熙氏らにより荻峠遺跡で採集された土器を保管している。本稿では、既往の調査地点・内容を整理した後、当館所蔵資料を紹介し、荻峠遺跡の位置づけについて考察する。

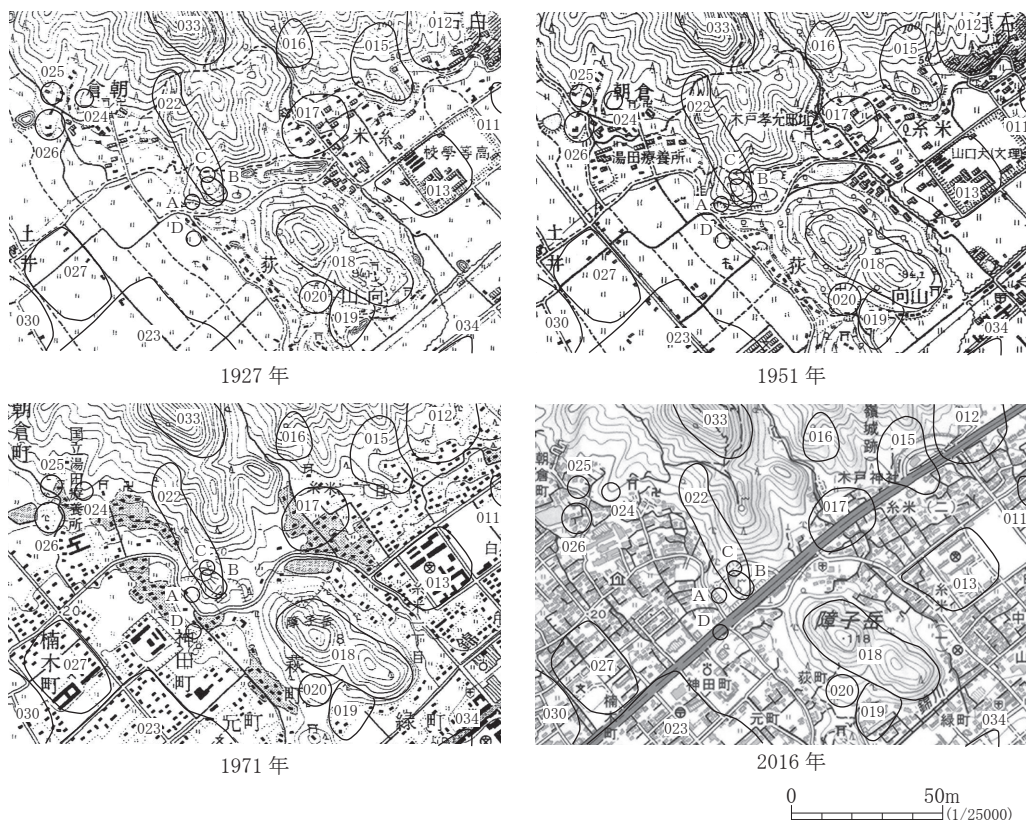
2 既往の調査地点と調査区

荻峠遺跡とその周辺は地形の改変が著しいため、現況と比較して旧地形を理解することが困難である。このためFig. 45では、最新のほか旧番地図³⁾（測量年：1927年・1951年・1971年）で周辺遺跡を含めた遺跡の範囲・荻峠遺跡の調査地点を示した。荻峠遺跡の指定範囲は大部分が小起伏山地で、北部の一部が砂礫台地上に位置する⁴⁾。

(1) 三宅宗悦氏報告地点及び宮本光胤氏・山本博氏調査地点

荻峠遺跡に関する最初の記録は三宅宗悦氏によるものである。三宅氏は山口高等学校内（糸米庁川遺跡）の発掘調査報告⁵⁾の際、文末に遺跡一覧表を掲載した。その中に「山口町荻峠」で「彌生式土器（鉢形底部）」の記載がある。また、同氏が提示した「2 周防國吉敷郡大字上宇野令字糸米山口高等學校遺物包含地実測圖」に出土地点が記載されている。図を拡大して確認すると出土地点は標高50m付近に位置する（Fig. 45-A地点）。1927年の地図ではこの付近に崖面がある。また、米軍撮影写真（PL. 39（1））でも崖面が確認できる。

宮本光胤氏・山本博氏もA地点を調査し、その結果を報告した⁶⁾。同報告によると、層厚約1m前後の包含層が崖面に露出しており、宮本氏・山本氏は弥生土器のほか、磨製石斧、砥石、敲石を採集した。筆者の編年観⁷⁾では、採集された弥生土器は中期Ⅱ～Ⅳに位置づけられる。



番号	名称	時代	番号	名称	時代
011	糸米五反田遺跡	中世	022	荻峠遺跡	弥生・古墳
012	鴻ノ峰墳墓群	古墳	023	湯田条里跡	弥生・中世
013	糸米庁川遺跡	縄文・中世	024	祇園ヶ森古墳	古墳
015	糸米遺跡	弥生・古墳	025	朝倉大歳遺跡	弥生～中世
016	木戸神社古墳	古墳	026	朝倉遺跡	弥生、古墳
017	糸米上野遺跡	弥生	027	湯田楠木町遺跡	弥生、古墳
018	障子ヶ岳城跡	中世	030	赤妻遺跡	弥生、中世
019	障子ヶ岳南遺跡	弥生・古墳	033	兄弟山城跡	中世
020	権現山古墳	古墳	034	中込田遺跡	縄文、弥生、中世

- A 三宅宗悦氏報告地点（三宅 1927）及び
宮本光胤氏・山本博氏調査地点（宮本・山本 1937）
B 小野忠熙氏らによる調査地点（小野編 1979）
C 山口県教育委員会調査区 1（森江・辻田 1974）
D 山口県教育委員会調査区 2（山口県教育委員会 1975）

※遺跡番号・遺跡名・時代・
遺跡範囲は山口県教育委員会
2016 による

Fig.45 荻峠遺跡位置図

(2) 小野忠熙氏らによる調査地点

小野忠熙氏は『山口県の考古学』で、「昭和二十六（一九五一）、村田益男氏が花崗岩丘の麓の土取場で竪穴跡と弥生土器や炭化したドングリを発見し、著者らが探査の結果丘の頂

にも土器が出土することを明らかにした。」と記載している⁸⁾。『高地性集落跡の研究 資料篇』では位置・地形の特色として、「山口盆地の北部一帯につらなる丘陵の1つの頂上に立地し、盆地の主要部を見渡すことができる。四方は急崖をなし、登り降りには極めて困難。」と記載し、頂部を中心とする範囲を遺跡範囲としている⁹⁾(Fig. 45-B地点)。1970年代には遺跡とその周辺の土取りがかなり進行しており、1971年の地図で上記の状況が看取できる。なお、『同 資料篇』では遺跡の標高110m、比高50mとしているが、1971年の地図では最高地点が約60m、破壊前の1927年、1951年の標高は約80mである。また、後述するD地点の遺構面から、比高は約61mである。

村田益男氏による調査については『島田川』掲載の「山口縣先史時代遺跡遺物発見地名表」に記載がある¹⁰⁾。上記の記載内容は下記の通りである。遺跡の種類：「竪穴・包」遺跡及び遺跡地の現況：「標高30～60m。比高14.9～44.9m。堀地～山林、山麓鞍部斜面」、遺物の種類：「彌土(破,30)」、発見年月日：26.10.8、保管場所及び保管者：「山口大学」、備考：「附近に土師器散布,中期」。

上記と小野氏による記載「花崗岩丘の頂からその南東の丘麓にかけて立地」から¹¹⁾、村田氏の調査地点はB地点南部とその南東側であったと考えられる。前述の米軍撮影写真にと1951年の地図には、B地点南東側に土取場に該当するとみられる崖面がある。

(3) 山口県教育委員会調査区1

1973年4月24日に内部に人骨を残す石棺1基が発見され、同年5月1～3日に山口県教育委員会により発掘調査が行われた¹²⁾。調査区の位置は注10文献図1の縮尺が小さいため判然としない。しかし、「標高約59m、水田からの比高約34mの丘陵の頂上近くに位置しているが、丘陵の周辺が削り取られたり、市道の開さくなどによって独立丘のような地貌をなしている」との記載、注10文献図版1・2で示された写真、1971年の地図から、当時残されていた山地部(Fig. 45-C地点)であったと考えられる。

発掘調査では、最初に発見された石棺(1号石棺)ともう1基石棺(2号石棺)が検出された。1号石棺(内法幅約40cm・長さ240cm前後)は棺内全面に赤色顔料が塗布されており、頭骨を除いた1体分の人骨と鉄鏃1点が出土した。2号石棺(内法幅35～40cm、長さ約175cm)は棺内全面に赤色顔料が塗布されており、棺内から1体分の頭骨が出土した。石棺の時期は人骨を除く遺物が鉄鏃1点のみであるため、詳細は不明である。しかし、報告で山口市乗ノ尾石棺(乗ノ尾石棺群)¹³⁾、象頭山石棺(象頭山墳墓群)、茶臼山石棺(茶臼山墳墓群)¹⁴⁾、美祢市内川石棺(内川古墳)¹⁵⁾と立地・規模・構造が類似することが指摘されている。上記の

石棺は弥生時代終末期～古墳時代前期とみられることから、荻峠遺跡1・2号石棺も弥生時代終末期～古墳時代前期と考えられる。なお、A～C地点はその後削平され、現在はスカパーJSAT株式会社スーパーバード山口ネットワーク管制センター敷地となっている。

(4) 山口県教育委員会調査区2

国道9号線・山口バイパスの建設工事に伴い、1974年9月11～10月18日に山口県教育委員会によって発掘調査が実施された。¹⁶⁾調査区は山麓の傾斜面に存在した水田である(Fig. 45-D地点)。調査の結果、標高約18.5～18.7mで古墳時代の土壙1基(KP-1)と弥生時代の重複した土坑5基の土壙群(YP-2)、ドングリ(イチイガシ・アラカシの堅果)多数を含む弥生時代の土壙(YP-1)が検出されたと報告されている。筆者の編年観では、KP-1出土土器は弥生時代終末期～古墳時代前期、YP-1出土土器は弥生時代前期・弥生時代中期(中期Ⅱ～Ⅲ)、YP-2出土土器は弥生時代中期(中期Ⅰ～Ⅱ)、弥生時代終末期である。YP-1出土の弥生時代前期の土器は混入であろう。

ドングリピットであるYP-1以外の土壙の性格は不明であるが、混入とみられる弥生時代前期の土器を除くと、主体となる時期は弥生時代中期(中期Ⅱ～Ⅲ)、弥生時代終末期～古墳時代前期である。

3 出土土器

当館で保管されている荻峠遺跡出土土器の多くには注記がある。以下で紹介する土器の日付には1953(昭和28)年5月3日・6月10・15・17・29日・11月12日がある。また、5は注記に「南斜面」の記載があるので、B地点南側の出土と推測される。一方、推測したものを含めてA・C・D・I地区の記載がある。詳細な出土地点は不明であるが、小野氏が記載した内容と遺跡分布から、山頂部を含むB地点内の複数箇所から出土した土器と考えられる。

1～10は弥生時代中期の土器である。1は壺の口縁部。口唇部をやや肥厚させる。2は壺の胴部。外面に2条の貼付突帯、内面にミガキを施す。外面は摩滅するが突帯はその形状から逆M字状であった可能性が高い。須玖式系であろう。3は甕の口唇部。面取りを行い全面に刻目を施す。4・5は甕の口縁～胴部。4は口唇部に面取りを行う。外面にタテハケ、口唇部内面にヨコハケ・胴部内面にタテナデを施す。外面にはススが付着する。5は口唇部を丸くおさめる。摩滅により内外面とも調整は不明。6・7は甕の胴部。6は外面に1条の刻目突帯を施す。刻目はO字状であるが、摩滅により原体は不明。内面にはヨコミガキを施す。7も外面に1条の貼付突帯を施す。内外面ともナデを施す。8は甕の口縁～胴部。口縁部は「く」

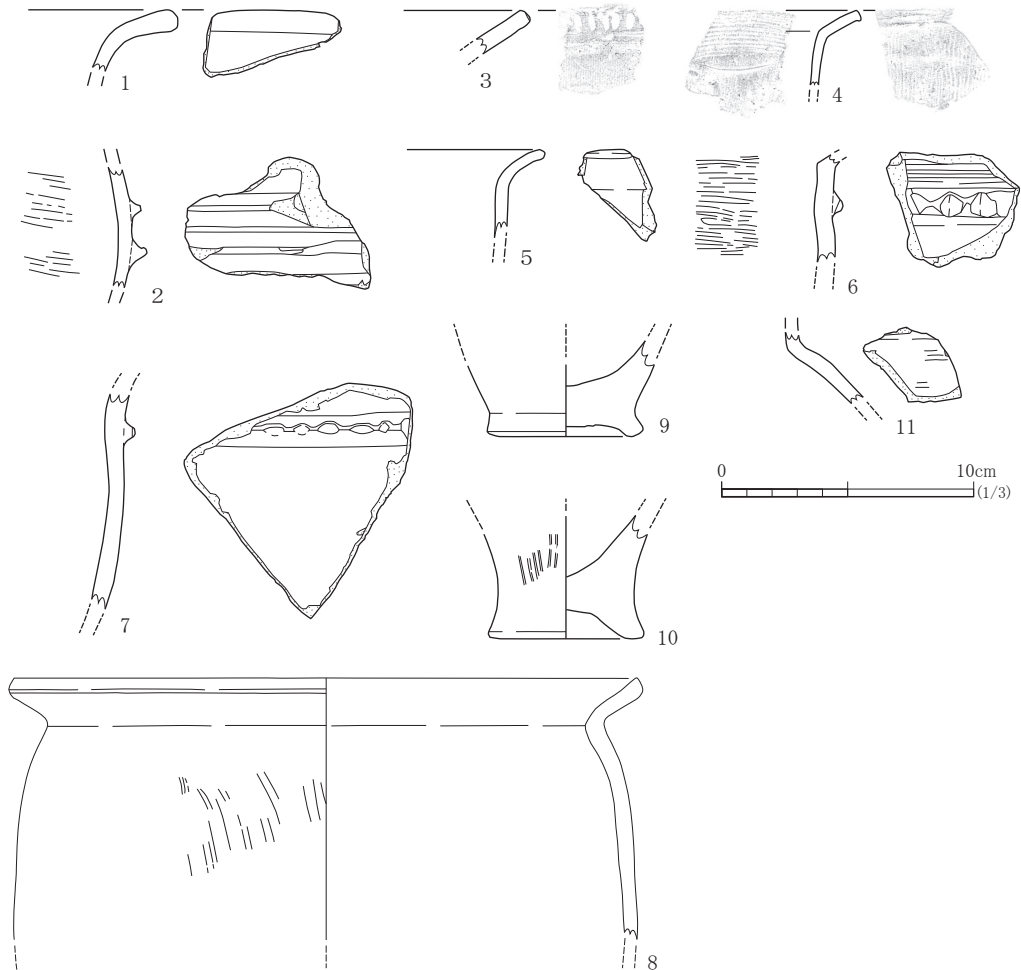


Fig.46 出土遺物実測図(土器)

字状に外反し、胴部がやや張り出す。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はタテミガキを施す。胴部内面の調整は摩滅で判然としないが、タテハケ後ナデとみられる。9・10は甕の底部。いずれも底部がやや張り出し、上げ底である。以上の土器は、1・3～8が中期Ⅱ～Ⅲ、2が中期Ⅲ～Ⅳ、9・10が中期Ⅱ～Ⅳの時期幅で捉えられる。主体は中期Ⅱ～Ⅲである。

11は弥生時代終末期～古墳時代前期の小型壺の胴部で、外面にヨコミガキ、内面にはナデを施す。この他、図化していないが内外面にミガキを施す壺胴部片 (PL. 39) がある。時期の断定はできないが、弥生時代中期の可能性が高い。注記は「ogi D 28. 11. 12」である。

4 考察

以上の検討結果から、各地点・調査区については下記のようにまとめることができる。A地点では時期不明の鉢の底部、石器（磨製石斧・砥石・敲石）、中期Ⅱ～Ⅳの土器、山頂部を含むB地点では弥生時代中期（中期Ⅱ～Ⅳ）の土器が採集された。またB地点南部から南東側においても弥生時代中期の土器が採集され、B地点南東側では竪穴も確認された。発掘調査では、C地点で弥生時代終末期～古墳時代前期の石棺2基、D地点では、弥生時代中期（中期Ⅱ～Ⅲ）の土壙1基、弥生時代中期（中期Ⅰ～Ⅱ）・弥生時代終末期の重複した土壙5基、弥生時代終末期～古墳時代前期の土壙1基が検出された。

B地点出土土器から、山頂部に集落が存在したのは中期Ⅱ～Ⅳと考えられる。荻峠遺跡の南西約1kmには、中期Ⅱの環濠集落である朝田墳墓群第Ⅱ地区¹⁷⁾、北西約1kmには環濠が存在したとされる亀山遺跡¹⁸⁾（中期Ⅱ～Ⅳ）がある。B地点の山頂部付近から南東側の山口市大内方面は障子ヶ岳により見通せないが、南西側では朝田墳墓群第Ⅱ地区、さらにその先の当時は海であったとみられる新山口駅北側、北東側では亀山遺跡を見通すことができた。一方、亀山遺跡からは山口市大内の一部と新山口駅北側の一部を見通せるが、障子ヶ岳により朝田墳墓群第Ⅱ地区を見通すことができない。上記を踏まえれば、荻峠遺跡は山口盆地の榎野川右岸における情報伝達・物流上の拠点的な集落であった可能性がある。一方、D地点でも中期Ⅱ～Ⅲの土器を出土した遺構が検出されていること、詳細な時期は不明だがB地点南部から南東側でも弥生時代中期の土器が採集されていることから、中期Ⅱ～Ⅲには山頂部と山麓部に集落が存在したと考えられる。なお、亀山遺跡の東の麓に位置する松柄遺跡¹⁹⁾でも弥生時代中期の土器が出土し、朝田墳墓群第Ⅱ地区の南西約130mの地点²⁰⁾でも弥生時代中期～終末期の土器が出土していることから、同様な状況を両遺跡でも想定できる。ただし、いずれも資料が少ないこと、実年代幅からこれらの高地性集落と山麓部の集落が同時期に存在した可能性については断定困難である。

上記を検討する上で参考となるのが防府市大崎遺跡の状況である。同遺跡では丘陵頂部に中期Ⅱ～Ⅲの環濠集落があり、穂積みされた状態の稲が出土している。また、低地部には中期Ⅱ～Ⅲの小規模な集落と水田に関連するとみられる中期以降の用水路が検出されている。上記から、周防の高地性集落には単独で存在せず、その麓には小規模な集落と水田などの生産域が存在する類型が想定できる²¹⁾ので、今後の発掘調査を踏まえた検討を待ちたい。

なお、荻峠遺跡のY P-1の花粉分析では、アカガシ亜属の花粉が優占でイネ科の花粉はきわめて少ないことなどから、「Y P-1形成当時の荻峠遺跡周辺は森林密度のいちじる

しく高いカシ・シイ林で被われていたことを示している」と分析されている²²⁾。上記からD地点に存在した集落は小規模であり、関連する水田等の生産域は湯田楠木町遺跡や湯田条里跡が位置する南西側に存在したと推測する。

弥生時代終末期～古墳時代前期については情報が少ないが、C地点及びその周辺に墓地が存在したほか、B地点の土器、村田氏の調査から集落も存在した可能性がある。

5 おわりに

本稿では、荻峠遺跡の既往の調査地点・内容の整理と当館所蔵資料の紹介を行い、荻峠遺跡の位置づけについて考察した。その結果、荻峠遺跡には弥生時代中期（中期Ⅱ～Ⅲ）に山頂部と山麓部に集落が存在したこと、山頂部の標高・比高は修正が必要であることを指摘した。また、山頂部～山麓部に存在した集落は、山口盆地における樫野川右岸の情報伝達・物流上の拠点的な集落であった可能性を考えた。先行研究との関連や山口盆地全体の集落遺跡の動向等については、別稿で改めて検討を行いたい。

本稿はJSPS科研費（20K01074）の研究成果の一部を含む。

[注]

- 1) 小野忠熙『山口県の考古学』、吉川弘文館、1985年
- 2) 小野忠熙編『高地性集落跡の研究 資料篇』、学生社、1979年
- 3) Fig. 45では下記の地図を使用した。測量年：1927年（陸地測量部1930年発行 25000分の1地形図「山口」、1951年（地理調査所1954年発行 25000分の1地形図「山口」）、1971年（国土地理院1973年発行 25000分の1地形図「山口」）、2016年（国土地理院2016年発行 25000分の1地形図「山口」）
- 4) 遺跡の地形分類は山口県環境生活部環境政策課の快適環境づくりシステム地理情報システム (<https://eco-gis.pref.yamaguchi.lg.jp/>) による。
- 5) 三宅宗悦「周防國吉敷郡山口町糸米山口高等學校構内土器包含地發掘調査報告」（山口高等學校歴史教室『山高郷土史研究会考古學研究報告書—台覧記念號』、1927年）
- 6) 宮本光胤・山本博1937「山口市吉敷附近の彌生式遺跡」（『考古学雑誌』第27卷10号、1937年）
- 7) 田畑直彦「周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題」（『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成22年度—』、2014年）
- 8) 前掲注1文献
- 9) 前掲注2文献

- 10) 小野忠熙編「山口縣先史時代遺跡遺物発見地名表」（『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告』、1953年）
- 11) 前掲注1文献
- 12) 森江直紹・辻田耕次「荻峠石棺」（『山口県文化財』第4号、1974年）
- 13) 山口県教育委員会『内川古墳・乗ノ尾遺跡』、1973年
- 14) 山口市教育委員会『茶白山石棺群・大伴石棺調査報告書』、1978年
- 15) 前掲注13文献
- 16) 山口県教育委員会「荻峠遺跡」（『下東遺跡・荻峠遺跡』、1975年）
- 17) 山口県教育委員会『朝田墳墓群V』、1982年
山口県教育委員会『朝田墳墓群VI』、1983年
(財)山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター『朝田墳墓群VII』、2009年
- 18) 田畑直彦「12 亀山遺跡」（『山口市史 資料編』考古・古代、2012年）
- 19) 浜田清吉『山口市後河原の遺物発見地』山口大学教育学部、1953年
- 20) 山口県教育委員会『朝田墳墓群II・鴻ノ峰I号墳』、1977年
- 21) 田畑直彦「山口県佐波川流域の弥生集落」（『古文化談叢』75、2016年）
- 22) 那須孝悌「山口市荻峠遺跡貯蔵穴中の植物遺体及び花粉（予察）」（『下東遺跡・荻峠遺跡』、1975年）

Tab.9 出土遺物観察表(土器)

法量()は復元値 ●は不明

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1			弥生土器 壺	口縁部				①②橙色	0.5~2mmの砂粒を含む	●(2か) 6.15荻峠●(A)
2			弥生土器 壺	胴部				①にぶい黄色 ②にぶい黄褐色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	28.6.15荻峠(A) 須玖式系
3			弥生土器 甕	口縁部				①灰色 ②にぶい黄褐色	0.5~2mmの砂粒を少量含む	28.6.10 ogi
4			弥生土器 甕	口縁~胴部				①②灰色	0.5~2mmの砂粒を少量含む	ogi●(Dか) 28.11.12
5			弥生土器 甕	口縁~胴部				①②にぶい黄橙色	0.5~4.5mmの砂粒を少量含む	28.6.17 ogi●(Iか) 地区
6			弥生土器 甕	胴部				①にぶい黄褐色 ②褐灰色	0.5~1.5mmの砂粒を含む	荻峠南斜面S28.5.3
7			弥生土器 甕	胴部				①橙色 ②浅黄色	0.5~3mmの砂粒を含む	ogi 荻峠(A) 28.●(5か) .2
8			弥生土器 甕	口縁~胴部	(24.7)			①②にぶい橙色	0.5~3mmの砂粒を含む	荻峠二八.六.二十九.No.12
9			弥生土器 甕	底部		6.2		①黄橙色 ②浅黄色・黄灰色	0.5~3mmの砂粒を含む	荻峠No.3
10			弥生土器 甕	底部		(6.1)		①②橙色	0.5~3mmの砂粒を含む	ogi 荻峠(A) No.5●●(北か) 区
11			弥生土器もしくは土師器 壺	胴部				①橙色 ②明黄褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	ogi C地区●(2か) S●11